

平成23年度 一橋大学法科大学院入学者選抜試験

小論文試験問題

・解答上の注意

1. 問題文は6枚、解答用紙は1枚（表・裏）、下書き用紙は1枚です。
2. 解答用紙に、一橋大学の受験番号を記入してください。氏名は絶対に記入しないでください。
3. 解答は横書きにしてください。
4. 解答用紙は、受験番号を記入する面が表になります。問1を表に、問2を裏に解答してください。
5. 解答用紙の追加、交換はしません。
6. 解答用紙の余白は採点者が使用するので、誤字脱字の訂正のほかは使わないでください。
7. 問題の内容についての質問には、応じません。
8. 試験終了後、問題文と下書き用紙は、持ち帰ってください。

小論文

〔問題文〕を読んで、次の問に答えなさい。

問1 この文章の考え方に対して予想される批判に反論しなさい。(句読点も1字と数え、800字以内とする。)

問2 この文章から推測される著者の結婚論に対して、あなた自身の考えを述べなさい。(句読点も1字と数え、1,000字以内とする。)

〔問題文〕

優生学は、計画的な方法を講じて、種の生物学的特質を改善しようとする試みである。その基礎となっている思想はダーウィンのもので、まことにふさわしいことに、優生学協会の会長は、チャールズ・ダーウィンの息子である。しかし、優生学的思想のもと直接の生みの親は、フランシス・ゴールトンであって、彼は人間の業績の中の遺伝的要因を強く力説した。

現代では、特にアメリカにおいて、遺伝は政党の問題になっている。アメリカの保守党は、成人の完成された性格は主として先天的な特徴による、と主張するのに対して、アメリカの急進派は、その反対に、教育こそすべてであり、遺伝などはつまらない、と主張する。私は、この二つの極端な立場のどちらにも賛成できないし、また、その双方に共通に見いだされ、正反対の偏見を生み出している前提にも賛成できない。すなわち、イタリア人や南スラヴ人のたぐいは、完成品として、クー・クラックス・クランに属する生え抜きのアメリカ人よりも劣っている、という偏見である。

人間の精神能力について、どの部分が遺伝に起因し、どの部分が教育に起因するのかを決定するデータは、いまのところ存在しない。この問題を科学的に決定しようとするなら、何千組もの一卵性双生児を選び、生まれたときから別々にして、可能なかぎり異なった方法で教育することが必要であろう。しかし、現在では、このような実験は実行可能ではない。

私自身の信念は、非科学的で、印象のみに基づくものであることを認めざるをえないが、だれでも悪い教育によって台なしにされる恐れがあるし、現にほとんどすべての人がそうなるのに対して、ある生まれつきの才能のある人たちのみが、いろんな方面で大いに傑出することができる、というものである。どのような程度の教育を施したところで、並みの少年を一流のピアニストに変えることができるとは信じられない。世界最良の学校といえども、われわれすべてをアインシュタインにすることができるとは信じられない。ナポレオンが、生まれつきの資質の面で、ブリアンヌの学友よりもすぐれていなくて、彼の母が、手に負えない息子たちをうまくさばくのを見て、戦術をおぼえただけだとは信じられない。このような場合、また、それほどではなくても、およそ能力にかかわる場合は、生来の素質というものがあり、そのために教育は、並みの素材を扱った場合よりもよい結果を挙げることができるのだ、と私は固く信じている。

事実、この結論を裏づける明白な事実がある。たとえば、ある人が賢い人か馬鹿であるかは、通例、頭の形

でわかるというような事実であるが、頭の形は、まず、教育から授かった特徴と見ることはできない。また一方、反対の極端な場合、つまり、白痴や低能や精神薄弱の場合を考えてみよう。最も狂信的な優生学反対論者でさえ、白痴は、少なくとも大半の場合、先天的なものであることを否定しない。そして、統計学的対称のわかる人には、このことは、反対の極にも、異常にすぐれた能力を備えた人が、これに見合った比率だけいることを含意する。

だから、これ以上四の五の言わずに、人間は先天的な精神能力の点で互いに異なる、と想定することにしよう。また、これは、もっと疑わしいかもしれないが、賢い人は、その反対の人よりも好ましい、と想定することにしよう。この二つの点が認められたなら、優生学者の主張の基礎が築かれたことになる。だから、われわれは、一部の主張者の言い分の細部についてはどう考えるにせよ、その立場全体を軽くあしらうべきではない。

優生学の主題については、特におびただしいナンセンスが書かれてきた。その主唱者の大半は、しっかりした生物学的基礎の上に、それほど確実でない、いくつかの社会学的な命題を付け加える。たとえば、美德は収入に比例する。貧困の遺伝（悲しいことに、あまりにもありふれている！）は、法律的な現象ではなく、生物学的な現象である。ゆえに、貧乏人の代わりに、金持ちを説得して子供を生む気にさせることができれば、だれもが金持ちになれるだろう、とかいうものだ。金持ちよりも、貧乏人のほうが子供をたくさん生むという事実についても、大騒ぎをしている。私は、この事実をあまり嘆かわしいと思う気になれない。金持ちのほうが、何かの点で貧乏人よりもすぐれている、という証拠がまったく見つからないからだ。よしんば嘆かわしいことであっても、ひどく深刻に残念がる事柄ではない。実は、数年の遅れがあるにすぎないからだ。貧乏人の出生率は減っており、いまや、九年前の金持ちの出生率に劣らず低いものになっている。

確かに、望ましくない種類の、差別的な出生率を助長する要因はいくつかある。たとえば、政府や警察当局が、バースコントロールの情報を入手することを困難にすれば、その結果は、一定の水準以下の知能の人びとはこの情報を入手することができなくなる一方、ほかの人びとに対しては、当局の企ては成功しない、ということになる。したがって、バースコントロールに関する知識の普及に反対するすべての企ては、知的な人びとよりも、愚かな人びとがたくさんの子供を持つことにつながるのである。しかし、これは、おそらくは、ごく一時的な要因であるように思われる。というのも、ほどなく、最も愚かな人びとでさえ、バースコントロールの情報を獲得しているだろうし、さもなければ——当局の反啓蒙主義オブスキュランティズムのかなりありふれた結果と思われるが——中絶手術をするのをいとわない人を見つけ出しているだろうからである。

優生学には二種類がある。積極的優生学と消極的優生学だ。前者はよい血統の促進を、後者は悪い血統の阻止を取り扱う。現在は、後者のほうがいっそう実施可能である。事実、アメリカのいくつかの州では、長足の進歩をしているし、イギリスでは、不適格な人びとの断種が近く実際の政治問題になろうとしている。このような措置に対しては当然反発を感じるかもしれないが、それは正しくない、と私は信じている。精神薄弱の女性は、周知のように、えてしておびただしい数の私生児を生みがちであり、概して、どの子も社会にとってまったく無価値である。こういう女性たちは、断種されるなら、本人自身もっと幸福になれるだろう。精神薄弱の女性が妊娠するのは、なにも子供を生みたいという衝動からではないからだ。もちろん、同じことは、精神薄弱の男性にもあてはまる。

確かに、この制度には由々しい危険がある。というのも、当局は、変わった意見や当局に対する反対をおしなべて精神薄弱のしるしだ、と無造作に考えるようになるかもしれないからである。けれども、おそらく、こういう危険をまねくのも無駄ではないかもしれない。白痴、低能、精神薄弱者の数が、こういう手段で大いに減らせることは、まったく明らかであるからだ。

私の考えでは、断種という手段は、精神的に欠陥がある人にはっきりと限定するべきである。私は、アイダホ州の法律のようなものを支持することはできない。この法律は、「精神的欠陥者、てんかん持ち、常習的犯罪者、道徳的な墮落者、性倒錯者」の断種を認めている。ここの最後の二つの範疇は、きわめて漠然としていて、

社会が異なれば、その決定もまた異なるだろう。アイダホ州の法律は、ソクラテス、プラトン、ユリウス・カエサル、聖パウロの断種も正しいとしたことだろう。その上、常習的犯罪者は、何か機能的な神経障害の犠牲者である可能性が大であり、この病気は、少なくとも理論的には、精神分析で治せるものであり、たぶん、遺伝ではないかもしれないのである。

イギリスでもアメリカでも、このような問題に関する法律は、精神分析学者の研究を知らないままに作られるので、やや似たような徴候を示すというだけの根拠で、まったく違ったタイプの障害をいっしょくたに扱っている。つまり、こういう法律は、現代の最新の知識に三十年ばかり遅れているのである。このことは、次のような事実の例証になる。すなわち、総じて、こういう事柄では、科学が少なくとも数十年間異議のないような安定した結論に達するまでは、立法するのは非常に危険である、ということだ。なぜなら、そうでなければ、誤った考えが法令として具体化され、したがって、治安判事に好かれるようになるので、その結果、よりすぐれた考えを実際に応用することが大幅に遅れてしまうからだ。

私の考えでは、いまのところ十分明確で、この方面で立法化の対象としてまちがいないのは、精神的欠陥のみである。これは、当局も異議を唱えない、客観的な方法で決定できるのに対して、たとえば道徳的墮落などは、見解の問題である。ある人が道徳的墮落者と見ても、その同じ人を別な人は予言者と見るかもしれない。私は、この法律は、いつか将来もっと拡大してはいけない、と言うのではない——ただ、言いたいのは、現在のわれわれの科学的知識は、この目的には不十分であるということ、ならびに、アメリカのいろんな州で確かに起こったように、社会が、その道徳的非難に科学の仮面をかぶせるのを許すような場合は大変危険である、ということである。

次に、積極的優生学に目を向けてみよう。これは、まだ未来に属しているけれども、もっと興味ある可能性をはらんでいる。積極的優生学の本質は、望ましい両親に多数の子供を生むように奨励する試みにある。現在は、これと正反対の現象が一般的になっている。たとえば、小学校で並みはずれて利発な少年は、出世して専門職階級に入り、したがって、おそらく、三十五歳か四十歳で結婚するだろう。一方、彼がもともといた環境にいる、さほど利発でない連中は、二十五歳くらいで結婚するだろう。専門職階級では、教育費は大きな負担になるので、子供を非常にきびしく制限することを余儀なくされる。おそらく、彼らの知的平均は、ほかのたいの階級の知的平均よりも少し高いと思われるので、このような制限は残念なことである。

この人たちのような事情に対処する最も簡単な方法は、その子供たちに、大学を出るまで無料の教育を施すことであろう。つまり、大ざっぱに言えば、奨学金は、子供の優秀さよりも親の優秀さに基づいて授けるべきである。これには、詰め込み教育と勉強のしすぎをなくするという、付随的な利点もあるだろう。なにしろ、詰め込み教育と勉強のしすぎが原因となって、最も賢い青年たちの大半が二十一歳に達する前に、過度のストレスのために、知的にも肉体的にも損なわれているのだ。

しかし、イギリスでも、またアメリカでも、国家が、専門職に従事している人びとに大勢の子供を生む気にさせるのに真にふさわしい措置を講じることは、おそらく不可能であろう。それをばむものは、民主主義である。優生学の思想は、人間は不平等である、という想定に基づいているのに対して、民主主義の思想は、人間は平等である、という想定に基づいている。したがって、優生学の思想が、低能のような少数の劣った人がいることをほのめかすかたちをとらないで、少数の優れた人がいることを認めるかたちをとるときには、この思想を民主主義社会で実行することは、政治的に非常にむずかしい。前者は、大多数にとって愉快であるが、後者は不愉快である。だから、前者の事実を具体化する措置は、大多数の支持を得ることができるが、後者の事実を具体化する措置は、それが得られない。

とはいえ、この問題を少しでも考えた人ならだれでも、だれが最上の血統の持ち主であるかを決定するのは現在はむずかしいかもしれないが、この点については、確かに違いがあるので、いずれ科学で測定できるようになるはずだ、ということを知っている。自分のオスの子牛のすべてに平等な機会をあたえなければいけない、

と言われた農夫の気持ちを想像してみよ。実は、次の世代の祖先となるべき雄牛は、その母方の先祖の乳を出す能力によって厳選されているのだ。(ついでながら、牛という種には、科学、芸術、戦争が知られていない以上、卓越した価値はメスのみに付随していて、オスは、せいぜいメスの優秀さの伝達者にすぎないことに注目してもいい。)

すべての家畜は、科学的な繁殖によって、大いに品種改良されてきた。人間も、似たような方法で、望みどおりの方向に変えられることは、疑問の余地がない。もちろん、人間の場合、何が望ましいかを決定するのは、ずっとむずかしい。体力を目標に人びとを育てたなら、頭脳が弱くなってしまふかもしれない。知的能力を目指して育てたなら、さまざまな病気に一段とかかりやすくなってしまふかもしれない。情緒のバランスを生み出すとするなら、芸術を破壊してしまふかもしれない。

こういう問題のすべてについて、必要な知識は存在しない。だから、現時点では、積極的優生学の面で多くのことをするのは望ましくない。しかし、次の百年のうちに、遺伝学や生化学が長足の進歩をとげて、現存の人類よりすぐれている、とだれもが認めるような人類を繁殖することが可能になるということも、大いにありうることだ。

しかし、この種の科学的知識を応用しようとするれば、本書でこれまで考えてきたどんなことよりも、一段と根本的な変革が家族に関して必要になるだろう。科学的な品種改良を徹底的に実行しようとするなら、各世代ごとに、男性の約二、三パーセント、女性の約二五パーセントを繁殖の目的のために取りのけておかなければならない。たぶん思春期に試験がおこなわれ、その結果、合格しなかった候補者は、全員断種されるだろう。父親は、その子孫に対して現在の雄牛や種馬くらいの関係しか持たないだろうし、母親は、特別な専門家になり、生活様式もほかの女性とは異なったものになるだろう。私は、こういう事態が起ころうとしている、と言うのではない。まして、それを望んでいる、と言うのでもない。正直言って、それは、たまたま嫌悪を催させるからだ。

にもかかわらず、この問題を客観的に検討してみると、そういう計画はめざましい結果をもたらすかもしれないことがわかる。議論のために、この計画が日本で採用され、三世代の終わりには、たいていの日本人男性がエジソンのように頭がよくて、プロボクサーのように強健になっていると仮定しよう。もしも、その間、世界のほかの国家が、事態を自然の成り行きにまかせたままにしておくならば、戦争で日本に太刀打ちすることは到底かなわなくなるだろう。疑いもなく、日本人は、このような高度の能力を身につけたからには、どこかほかの国家の男を兵士として雇う方法を見いだすだろうし、勝利を得るために科学的技術に頼り、そして、まずまちがいなく、勝利を収めることだろう。このような制度では、国家に対する盲目的な忠誠を若者に注入するのは、いともたやすいことだろう。将来、この種の発展がありえない、とだれに言えようか。

あるタイプの政治家や政治評論家に大変人気のある、一種の優生学がある。これを人種優生学と呼んでもよい。この優生学は、ある人種または国民は(もちろん、筆者もそれに属している)、ほかのすべての民族よりもずっと優秀であるから、劣った種族を犠牲にして数を増やすために軍事力を行使すべきだ、という主張から成り立っている。この最も注目すべき例は、アメリカ合衆国における北欧人のプロパガンダで、それは、移民法の中で立法上の承認をかちとることに成功している。この種の優生学は、ダーウィンの適者生存の原理に訴えることができる。そのくせ、奇妙なことに、その最も熱心な主唱者は、ダーウィン説を教えることは違法とすべきだ、と考えている連中である。人種優生学の結びついている政治的プロパガンダは、大部分、望ましくないたぐいのものである。しかし、このことは忘れて、この問題をその真価によって検討してみよう。

極端な場合、ある民族が他の民族よりも優秀な場合があることは、ほとんど疑いがない。北アメリカ、オーストラリア、ニュージーランドは、まだ原住民が住んでいるとした場合よりも、まちがいなく、世界の文明に一段と大きな貢献をしている。大体において、黒人は平均して、白人よりも劣っている、と見てさしつかえないようだ。ただし、黒人は、熱帯での仕事になくなくてはならないので、黒人の絶滅は(人道上の問題を別にして

も)、はなはだ望ましくないだろう。しかし、ヨーロッパの民族の間に区別をつける段になると、政治的偏見をささえるために、悪い科学をどっさり持ち込まなくてはならない。また、黄色人種がわれわれ高貴な人種よりもいくらかでも劣っているとみなすべき正当な根拠は、私には見つからない。こういう場合はいつも、人種優生学は狂信的愛国主義の口実にすぎない。

ユーリウス・ヴォルフは、統計のある主要国のすべてについて、人口一〇〇〇人あたりの死亡に対する出生の超過数の表を示している。フランスが最低で(一・三)、次がアメリカ(四・〇)、それからスウェーデン(五・八)、英領インド(五・九)、スイス(六・二)、イギリス(六・二)である。ドイツは七・八、イタリアは一〇・九、日本は一四・六、ロシアは一九・五、エクアドルは世界第一で、二三・一である。中国は、この表に出ていない。実情が不明であるからだ。

ヴォルフは、西洋世界は、東洋、すなわち、ロシア、中国、日本に圧倒されるだろうという結論を出している。私は、エクアドルを信用することでヴォルフの議論に反駁するつもりはない。むしろ、ロンドンの金持ちと貧乏人との間の出生率の比較を示すヴォルフの数字(すでに言及した)を示すことにしたい。それは、貧乏人の出生率は、数年前の金持ちのそれよりも低くなっていることを示しているのである。

同様なことが、もっと長い期間がかかるが、東洋にもあてはまる。つまり、東洋が西欧化するにつれて、必然的に出生率は下がるにちがいない。一つの国が軍事的な意味で恐るべきものになるには、工業化されるほかに道がないし、工業化は、子供を制限することにつながるような心的傾向をもたらす。したがって、われわれは、西欧の狂信的愛国主義者(前ドイツ皇帝に続く)が恐ろしいと公言している東洋の支配は、かりに起こったとしても、大した不幸にはならないだろうし、また、そういうことが起こると予期すべき確かな証拠はない、と結論せざるをえない。にもかかわらず、戦争屋たちは、おそらく、国際的な権威が、各国の人口の許される割り当てを決めることができるような時期がくるまでは、とりわけ、この悪霊を利用しつづけるだろう。

ここでもまた、以前の二つの場合と同様に、国際的な無政府状態が続いている間、科学が進歩していくなら、われわれは、人類に迫る危険に直面する。われわれは、科学のおかげで目的を達することができるが、目的が邪悪であれば、結果は災いとなる。もしも、世界が依然として悪意と憎悪に満ちているなら、世界が科学的になればなるほど、ますます恐ろしいものになる。だから、こういう感情の毒々しさを減らすことが、人類の進歩の要件である。こういう感情は、大部分、誤った性倫理と悪い性教育によってもたらされたのである。文明の将来のためには、ぜひ、新しい、よりよい性倫理がなくてはならない。性道德の改革が、現代の最重要な必要の一つになるのは、まさに、この事実によるのである。

個人道德の観点からすると、性倫理は、科学的で迷信的でないなら、何よりもまず優生学的な考慮を優先するだろう。すなわち、性交に対する現存の抑制がどんなにゆるめられようとも、良心的な男女は、自分の子供が将来どんな価値を持つかを真剣に考えもしないで、子供を生むようなことはしないだろう。避妊法のおかげで、親になることは自発的になり、もはや、性交の自動的な結果ではなくなった。前の諸章で考察した、もろもろの経済的理由で、父親は将来、子供の教育と扶養に関して、過去よりも重要でなくなりそうに思われる。だから、女性が、愛人または友達として好きだと思う男性を子供の父親として選ばなければならない強い理由は、さほどなくなるだろう。

未来の女性は、幸福をひどく犠牲にすることもなく、優生学的な考慮から子供の父親を選ぶ一方、普通の性的なつきあいでは、個人的感情のおもむくままにふるまうことが、とても容易にできるようになるかもしれない。男性にとっては、子供の母親を、親として望ましいという理由で選ぶことが、一段とたやすくなるだろう。

私のように、性行動は、子供が含まれる場合に限って社会とかかわってくる、と考えている人びとは、この前提から、将来の道德に関して二重の結論を引き出すにちがいない。すなわち、一方では、子供と関係のない恋愛は自由であるべきこと、しかし、他方では、子供を作ることは、現在よりもずっと慎重に、道德的考慮によって規制される事柄であるべきだ、ということだ。しかし、ここに関係する考慮は、従来認められたものと

はいくぶん異なるだろう。ある場合の出産が道徳的とみなされるためには、牧師があることばを宣言したり、登記官がある書類を作成したりする必要は、もはやなくなるだろう。そういう行為が子供の健康や知能に影響するという証拠は、どこにもないからだ。

必要だとみなされるのは、当の男女が、自分自身にも、自分が伝える遺伝の面でも、望ましい子供を生む見込みがあるようであればならない、ということだ。この問題について、科学が現在よりも正確な判断を下せるようになるとき、社会の道徳的意識は、優生学的見地から見て一段と厳しいものになるかもしれない。最もすぐれた遺伝子を持った男性が、父親として熱心に捜し求められるようになるかもしれないし、一方、ほかの男性は、愛人としては受け入れられるかもしれないが、父親になろうとすると、はねつけられるかもしれない。これまでであったような結婚制度では、こういう計画はいずれも人間性に背くものとされてきたので、優生学が実際に利用される可能性はきわめて少ない、と考えられていた。

しかし、人間性が、将来も同様な障害を設ける、と想像しなければならぬ理由はない。というのは、避妊法によって、子供を生むことと、子供を伴わない性関係とが分離されつつあるし、父親も将来は、以前のように子供と個人的な関係を持たなくても済みそうであるからだ。過去の道学者たちが結婚に付与した厳粛さと崇高な社会的目的は、世界が倫理の面でもっと科学的になるなら、生殖だけに付与されることになるだろう。

こうした優生学的なもの見方は、ある並みはずれて科学的な人びとの個人的な倫理として始まるにちがいないが、ますます広く受け入れられて、とうとうおしまいには、たぶん、望ましい親には報奨金、望ましくない親には罰金というかたちで法律に具体化されるようになる。

われわれの心の奥底にある個人的な衝動に科学の干渉を許すという考えは、確かに、不愉快きわまるものである。しかし、そこに含まれる干渉は、長い間宗教の面で耐えてきた干渉よりもはるかに少ないだろう。科学は、この世界で新しいもので、伝統による権威も、宗教が、幼いころわれわれの大部分のものに及ぼすような影響力も、まだ持っていない。しかし、科学が、同じような権威を獲得し、宗教の教えに対する人びとの態度の特徴になっているのと同じ程度の従順さで、服従されるようになることは、十分にありうることである。

子孫の幸福などということは、確かに、情熱に駆られているときの普通の人をコントロールするほどの動機では決してない。しかし、もしも、子孫の幸福が公認の積極的道德の一部となり、称賛や非難ばかりではなく、経済的な賞罰によっても是認されるようになるなら、まもなく、いかなる品行方正な人も無視できかねる、重要な事柄として受け入れられるようになるだろう。

宗教は、歴史が始まる前から存在してきたが、科学は、せいぜい四世紀前から存在しているにすぎない。しかし、科学が年月を経て、敬われるようになると、宗教と同じように、大きく、われわれの生活をコントロールするだろう。人間精神の自由を大事にする人びとが、こぞって科学の暴政に反逆しなければならぬ時期がくるのを、私は予感している。にもかかわらず、暴政が避けられないとすれば、その暴政は科学的であるほうがよい。

【問題文は、安藤貞雄 訳『ラッセル結婚論』（岩波書店、1996年）からの抜粋である。原文の一部を省略し、表記を変更した箇所がある。】